

## 開業1年

## 小野田雅仁

おのだ皮膚科  
(横浜市西区)

平成24年4月に、おのだ皮膚科を開業しました。横浜市立大学皮膚科学教室在籍中は、多くの先生方にお世話になりましてありがとうございました。早いもので、開業してあっという間に1年が過ぎました。

まずは、クリニックの紹介をさせていただきます。

当院は、横浜市西区岡野にある「サミット」というスーパーの2階の医療モール内にあります。最寄りの駅は、相鉄の平沼橋駅ですが、最寄りとは言っても7分程度歩きます。決して交通の便がいい場所とは言いきれないのですが、サミットの無料駐車場が医療モールと直結していますので、車の方は便利かもしれません。

医療モールには、皮膚科以外に内科・整形外科・小児科・調剤薬局が入っています。他科の先生方は、全員僕よりも10個程度学年が上で、慶應大学の出身です。どの先生も気さくな方ですので、横のつながりを持って診療を行えています。

例えば、少し前に小児科に口唇を切って出血が止まらないという子が来ました。元々、小児科の先生は小児外科をされていたので、創のことはとても詳しいのですが、バイポーラなどないために当院に紹介をして下さいました。小さいお子さんで、押さえたりする人手も必要だったので、一緒に処置を行いました。ちょっとした処置ではありましたが、病院勤務時の中央手術室でのオペを思い出しました。ご家族にしても、小児科医師と皮膚科医師と一緒に処置を行ったので、安心されたことと思います。

診療以外にも、人事のこと、運営のこと、ちょっとしたことなどで悩むことがあれば、診療後に他のクリニックに行き相談することができます。僕にとっては、皮膚科診療以外のあらゆることが「ルーキー」ですので、近くに相談できる人がいることは

とても心強いです。

診療以外では、休診日の水曜日に、月に1~2回程度ですが、非常勤講師として大学に行かせていただいています。そこでは、入局して比較的時間もない先生たちに、病理の話、覚えておいて損はない(であろう)ワンポイントスライド供覧、毎回持ち回りでのテーマ別勉強などを行っています。これまでに覚えてきたことを忘れないようにということと、新しい知識を勉強するきっかけに役立てています。また、勉強会を通じて、後輩たちに少しでも皮膚科の面白さや奥深さを知ってもらえれば……と願っています。

病院勤務時代には、横浜市大病院、藤沢市民病院で褥瘡対策チームを担当させていただいていたこともあり、以前より当医会の在宅医療委員会に所属をさせていただいております。平成24年度より、袋秀平先生のもと、フットケア担当副委員長にさせていただいたこともあり、褥瘡とフットケアについては、更に勉強していかなければいけないと思っています。細々とですが往診を行い、在宅での褥瘡診療などにも関わっています。病院にいた時のような大きな処置はしにくいですが、地域の第一線で少しでも



スタッフと一緒に

困っている方のお役に立てればと思っています。

フットケアについては、平成25年1月にフットケア研究会を開催させていただきました。右も左もわからない状況の中で、袋先生をはじめとする在宅医療委員の先生方のお力を借り、平日にも関わらず200名以上の方にご参加いただき、盛会に終わりました。

4月からは、約10年前の横浜市立市民病院在職時、僕を皮膚科医として育ててくださった毛利忍先生に、週一度診療のお手伝いに来ていただくことになっています。当院の患者さんの数は2人で診るほど多くはないのですが、いつかもう一度ご一緒にお

仕事をさせていただきたいと思っていましたので、とても楽しみにしています。また、隣に師匠がいると思うと、「下手な診療はできないな……」と背筋が伸びる感じがします。せっかく来ていただけるので、有意義なものにしていきたいなと思っているところです。

まだまだ余裕がないですが、少しずつでもいい意味で楽しみながら皮膚科診療をしていきたいと思っています。また、神奈川県皮膚科医会についても、フットワーク軽く活動していきたいと思っておりますので、今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。

## 開業

### —内山光明先生の思い出とともに—

「とうとうドクターストップがかかってね、来月の7月末で診療所を閉院することにしたんだよ。それでね先生、後を継いで開業してくれないかな？ 相原教授には言っているから。」

内山光明先生から突然、お電話でそうお話がありましたのは、平成23年6月下旬のある夜のことでした。神皮の皆様はよくご存知のことと思いますが、内山先生は県立がんセンター部長を退職された後、京急杉田駅の駅ビル内に「内山皮フ科」をご開業され、神皮常任幹事・横浜市皮膚科医会幹事・磯子区医師会副会長・俱進会（横浜市立大学医学部同窓会）役員などを歴任され、横浜市医師会学術功労者として表彰も受けられたキャリア豊かな先生でした。しかし平成20年末からご体調を崩され、加療のため定期的に入退院を繰り返していらっしゃいました。内山先生がご入院中の診療は、横浜市大の医局員が交代で応援に伺っておりました。私もそうした応援医局員の一人でした。「継いでくれないかな？」と私を指名して下さった内山先生のお電話は、若輩者の私にはもったいないほどありがたいお話ではありましたが、当時まだ皮膚科入局7年目であり「開業」という想定を全く抱いていなかったため、とまどいや不安のなかでか



## 小森絢子

杉田駅前皮ふ科  
（横浜市磯子区）

なり迷いました。が、家族とも相談を重ねた結果、内山先生のお話をお引き受けすることに致しました。

私は平成14年に群馬大学医学部を卒業後、横浜市大で2年間研修医としてすごし、平成16年に横浜市大皮膚科へ入局、翌17年には大学院へ進学致しました。大学院では池澤善郎教授（現・国際医療福祉大学熱海病院教授）、相原道子教授、横浜市大薬理学教室・五嶋良郎教授のご指導の下で、「アトピー性皮膚炎とかゆみ」をテーマに神経成長因子（nerve growth factor：NGF）やセマフォリン3A（Sema3A）という切り口から研究致しました。幸いNGFの研究はJournal of Dermatological Scienceに、Sema3Aの研究はJournal of Investigative Dermatologyに掲載され、院卒業時には最優秀論文賞を頂く事ができました。またSema3Aの研究は、幸運にも毎日新聞やYahoo！ニュース（トップページ）、Newton（科学雑誌）といったメディアにも取り上げて頂き、小さな自分をここまで導いてくださった諸教授方のご指導力に何度も深謝致しました。

皮膚科専門医・日本アレルギー学会専門医・博士号の資格を取得し、さあこれから医局へご恩返し……という段階で急遽開業することになってしまっ

たことに大変心が痛みましたが、池澤教授、相原教授からは実にあたたかい励ましのお言葉を頂き、落涙の思いでございました。

それからの3ヶ月弱で慌しく開業準備をすすめました。内山先生はご病身というお辛い身にも関わらず私のことを心配して下さり、まるで肉親のような細やかさで開業までの段取りを丁寧に教えて下さいました。クリニックの場所と電話番号は内山先生からそのまま引き継がせて頂きましたが、カルテに関しては、内山先生が『内山皮膚科のカルテ』として終了したい。小森先生には自分の力でゼロからカルテを積み上げて行ってほしい」とご希望でしたので引き継がず、電子カルテを新規に購入しました。内装は傷んだところを修理し、カーテンや置物類は女性らしさができるように交換しました。

診察室の医師用椅子は、お体が大きい内山先生が使っていた大きくて重厚なものがありました。私には立派すぎましたので、こぢんまりしたものを新しく用意しました。内山先生が「生涯現役」にこだわり、つらい化学療法中も「クリニックに戻ってまた診療をするんだ!」という強いお気持ちを心の支えにして闘病されていたことを私は知っておりましたので、開業した後も内山先生を「名誉院長」としてお招きして、ご体調のよい日には「内山先生診察日」を設けて一緒に外来をやりたいと考えておりました。ですから、いつ内山先生がいらしても座って頂けるように、内山先生の大きな椅子は処分せず院長室に大切に置いておきました。

そして、「内山皮膚科」閉院から3ヶ月後である平成23年10月1日、新しく「杉田駅前皮膚科」として出発致しました。ですが、内山先生がご闘病中でやむを得ず閉院されたご心中に配慮し、開院に際しての内覧会や広告等は一切致しませんでした。内山先生はわが事のように開院を喜んで下さいましたが、その頃からご容態が次第に不安定になってゆきました。「先生のお椅子も準備して待っておりますので、お体が落ち着かれましたら『名誉院長』としてぜひ杉田に診察にいらして下さい」とお話しすると「ああ、行きたいねえ」と嬉しそうに答えて下さったことが忘れられません。しかしその願い叶わず、平成23年11月5日、内山光明先生は永眠されました。本当に残念でなりません。

内山皮膚科の頃から引き続き通って下さっている

87歳のOさんという常連の患者さんがいます。脊柱管狭窄症で長年激痛に悩まされており、手術をすすめられているものの諸事情で入院できない、という方です。いつも皮膚の話はすぐ終わり、腰痛がいかに辛いかについて切々と訴え「こんなに痛いのなら早く死にたい、死にたいと思っているのですよ」と毎回話して帰られます。そんなOさんがある日、「内山先生が亡くなられたと伺いました」とのお話の後で、こんなエピソードを教えてくださいました。『痛みが辛くて死にたい』と内山先生にお話しをしたら、内山先生が突然、がしっと私の両肩をつかんで『Oさん、死んじゃだめだよ。僕はもうすぐ死ぬんだ。Oさんは痛くたって生きられるんだから、いいじゃないか。どんなに痛くたってしっかり生きなくちゃだめだよ』と目を見ながらいつになく力強い調子でお話しされました。それが内山先生の最後の診察でした」と。話を聞きながら、私はこみ上げてくる涙を抑えることができませんでした。内山先生はVitality溢れる方でしたから、どんなにか、どんなにか、生きたかったことでしょう！ 近づきつつあるご自分の「死」を静かに見つめながら、最期まで患者さんを励まし続けた内山先生。豪放磊落なご印象が強いですが、その半面、実に細やかなお心配りもできる繊細さも持ちあわせたすばらしい先生でした。

開業からはや1年半。お蔭様で心優しいスタッフの皆様にも恵まれ、勤務医とはまた違った魅力にやりがいを感じている毎日ですが、同時に開業医は孤独です。特に私は若くしての開業であり、しかも子供がまだ小さくて夜の勉強会に出席しにくいという事情がありますので、自分の研鑽のため、そして微力ながら大学のお手伝いができればとの思いから、今も自院の休診日である毎週木曜日に横市大病院で外来をさせて頂いております。幸い杉田は横市大から近いので、何かのときには大学へ文献を調べに行くことができたり紹介できたりという利点がありますが、大学に近いからこそ、なおのこと気持ちを引き締めて診療にあたらなければといつも自分に言い聞かせております。相原教授をはじめとする横市大の先生方、そして先輩の先生方には現在も一方ならぬご指導を賜っておりますことに深く感謝申し上げますと共に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

神皮の先生方、若輩者ではございますが、今後ともご指導のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



## あっという間に開業2年目を迎えました



宋 寅傑

綱島診療所 そう皮フ科  
(横浜市港北区)

私は昭和62年に昭和大学を卒業し、平成13年4月、新規開院した昭和大学横浜市北部病院に皮膚科責任者として派遣され、以後10年余り同院にて勤務の後に開業いたしました。北部病院への着任以降、神奈川県皮膚科医会の先生方には大変御世話になり、今日に至っております。

私の開業のきっかけは妻の父の診療所を継承する必要性が生じたことでした。妻の父は東急東横線の綱島駅から徒歩10分程の場所で昭和34年より「綱島診療所」という内科・小児科・皮膚科の診療所を開設しておりましたが、平成21年夏、それまで診療所の事務を手伝って忙しく働いていた義母が体調を崩し、義父も高齢となったため、結局私が診療所を継承することとなり、旧診療所の方は平成22年3月末に一旦閉院いたしました。

開業の準備は北部病院開院当初から信頼していた某製薬会社のMRさんより某卸会社開業支援部の方々を御紹介いただき、平成23年3月頃より活動を開始いたしました。この時期はまさにあの東日本大震災が起きた時期であり、福島原発の放射能事故も重なって震災後しばらくは社会の混乱が続き、開院は10月を予定しておりましたが、自分は本当に開業できるのかと一時非常に不安に陥りました。しかし一度乗り出した船ということで、当初の予定通り7月末をもって北部病院皮膚科准教授の職を辞し、開業準備に専念いたしました。県皮膚科医会の先生方には7月の第136回例会情報交換会の席で開業することをお伝えいたしました。その際に“だったら皆さんに退職と開業の御挨拶をしなきゃ”と言われていきなりマイクの前に立たされ、しどろもどろになって皆様に退職と開業の経緯をお話しさせていただいたことを今懐かしく思い出します。

開業準備の方はその後、診療所の内装改修工事、開院に伴う事務的諸手続き、院内備品の購入、資金融資の確保、看板や広告類のオーダー、地区医師会への入会、スタッフの確定と診療業務演習、近隣の

先生方への御挨拶など開業される先生方が経験される諸々の過程を経て、平成23年10月2日日曜日に内覧会、翌3日月曜日より診療開始に至ることができました。診療所名は、先代の名称を引き継ぎ、「綱島診療所 そう皮フ科」としました。

振り返りますと開業準備期間は決めなければならないこと（内装の細々したこと、カルテや診察券等の様式、広告の方法や内容、院内の棚・机や器具等の詳細、薬品や検査等のマスターその他無数）と医師会入会や融資申込みなどの諸手続きの連続で、退職から開院までは時間が全然無かったような気がいたします。いっそ開院をもっと遅らせようかと考えたことさえありましたが、実は本年1月に義父が体調不良の義母よりも先に肺炎のため84歳で逝去いたしましたので、義父がまだ元気であったこの時期に新しい診療所を開院できて本当に良かったと、今しみじみと思っております。

次に開院してからのことになりますが、開業に際して決めなければならないことにまず、電子カルテと予約制導入の件があります。私は北部病院で、10年余り電子カルテ（富士通のシステム）を扱ってきましたが電子カルテには慣れるどころか年を追ってどんどん嫌悪感が増しましたので、カルテは昔ながらの紙カルテとし、また予約制については昭和大学病院や北部病院で患者様の御希望に沿って組まれた実行できる筈もない無理な予約スケジュールに日々悩まされ続けたので予約制も導入せず患者様の呼び出しは御来院順と決めました。また、休診日に関しては水曜日午前午後と土曜日午後および日曜、祝日といたしました。

開業してから感ずることについて述べますと、まず、医療は医師一人では到底成り立たないという当たり前のことを大学病院時代以上にひしひしと感じております。小さな診療所では医師が診療だけ行ってその先の事務を行わなければ収入は1円も得られないわけですので特に受付・事務スタッフの重要性

は身に染みて感じるようになりました。当院では薬剤師である妻に毎日医療事務全般を統括してもらい、ついでに小児処方薬の用量もしばしばこっそり妻に計算してもらったりなどしているため、開業してからは妻に対してそれまで以上に頭が上がらなくなっていました。

また、日々の診療に際しては薬剤や検査の保険適応を大学病院時代よりも念入りに確認するようになりました。これも真面目にやらないと自身の収入に直結するわけですから当然と言えば当然でしょう。大学を離れた今、保険適応もさることながら、医学の学問自体ももう少し真面目に勉強しなければならないのでは？とも思うのですが……。

あともうひとつ、開業してから時間の流れが非常に早いように感じられます。これも大学病院時代より波風のない毎日を送っているのが当然のことではありますが、開業してからは大学病院時代の1ヶ月

が1週間程度で過ぎ去っているという感覚です。そのまま知らないうちにどんどん齢を取ってふと気が付いたら歩行もままならない老人になっているのかなど、ふと不安になることもあります。そのような早い時間の流れの中でひとつ思い出されることがあります。それは昨年12月7日の関東信越厚生局による新規個別指導の日のことです。この時は医師側の担当官が何と県皮膚科医会会長の鎌田英明先生となり、ビクビクしながら妻と共に指導に臨みましたが、特に絞られることも無く、指導は短時間ですんなりと終了になりました。鎌田先生には改めまして、深く感謝を申し上げる次第です。

以上、とりとめも無いことばかり書き立てて参りましたが、途中で息絶えなければ今後30年くらいは開業医を続けて参るつもりですので、無理はせずにごできることを着実にやっ行って行こうと考えつつ、どっぷりと開業医の世界に浸っている今日この頃です。

## 2代目院長就任12年



**天野隆文**

天野皮膚科医院  
(逗子市)

私が、父の後を継いで逗子で本格的に診療を始めると早、12年目になります。父が逗子に皮膚科単科での開業をしたのは昭和39年、私が、生まれた年のことでかれこれ半世紀になろうとしています。当時は皮膚泌尿器科で開業される先生が多く、単科で開業するとしたところ先輩方からはそれは無謀だと言われたとの話を聞いております。はじめは民家の一角を借りたせまい路地の目立たぬ場所でのスタートでした。その10年後、現在のJR逗子駅近くにクリニックを構えて現在に至ります。

神奈川県皮膚科医会でもお世話になった亡父、文武が食道癌と診断されたのを機に、当時北里大学に在籍していた私を、何かの時に助けられるようにとの配慮で勝岡教授に近隣の関連病院の一つである衣笠病院へ出向させていただきました。週に数度、病院での勤務が終わってから実家のクリニックの診療する日々が5年ほど続きました。

昔ながらの軟膏、習った時代も背景も違ったため、はじめはかなり戸惑うこともありましたが父に聞きながらなんとか慣れていきました。父が不在で私が診療をはじめた当時は「大先生は？」「院長先生は？」と聞かれることが多く、父の人気にちょっと嫉妬したものでした。昔ながらの軟膏や、治療法も多く、まさに温故知新。大学病院でおそわってきたことだけでなく、古くからの治療法、父が工夫して作ったりした混合剤の有用性に目から鱗が落ちることもありました。おかげで治療法の引き出しが増えたのも収穫でした。それまでは、父と治療法についての意見交換などほとんどしたことがなかったため、貴重な時間を与えられたと思っています。長年、通われる患者さん方のニーズにも合っているようで現在でも概ね父の時代の軟膏療法を踏襲しつつ私のアレンジを加えた診療を行っています。

平成23年11月に父が亡くなった後、本格的に現

在のクリニックを継ぐことになりましたが、勤務医の頃とは違う経営者としての管理業務など、私にとって苦手なことが多く、家内の力に頼りきっております。以前は玄関でスリッパに履き替えていただいていたところを土足にしたり、カルテの棚の配置を変えて使い勝手をよくしたりと、少しずつ改善していくのも同じ皮膚科医である家内のアイデアによるところが大きく感謝しております。

最後に、逗子で診療している思うことを少々紹介させていただきます。まわりを比較的低い山に囲まれ、海もあり、虫による皮膚炎が多いと思います。さらに、逗子の市の木がツバキであることもあり、

茶毒蛾、毛虫による皮膚炎が非常に多くみられます。夏場は海水浴客も多く、プランクトンによる海水浴皮膚炎、雲丹を踏みつけるなどなど。最近では海水温の上昇の為かプランクトンの発生が年々早くなっているように思います。以前はお盆以降に多かったのが最近では7月の終わり頃から患者さんがいらっしゃいます。アライグマが屋根裏に住み着いたために、ノミが大発生したとか、見られる病気も以前と変わってきています。今後もこの土地での地域医療をしつつ病気の移り変わりが見られるか観察していきたいと思います。

